

「はじまりは神」

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6

August.1.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6 (パウロ)

Preface

エペソ書 1 : 1 から始まったエペソ書の説教ですが、今日で 6 回目になります。でもまだ、1 - 6 節までの内容を終えることが出来ていません。

いい加減、次の 7 節からの内容を学んで行きたいと思っはいるのですが、1 - 6 節までの内容が、人間の言葉ではとてもとても言い尽くすことなんか出来ないほどに豊富過ぎて、今日も同じ箇所からのメッセージをすることをご了承いただけますと感謝です。

ある牧師先生は、「エペソ 1 章 1 節から読み進めて行き、5 節に入ったところであまりの恵みに気絶して然るべきだ」とまでおっしゃるほどに、その内容は聖書が語ろうと、聖書が知って欲しいと思っていることの髓が記録されています。

このエペソ書のメッセージをするにあたって、私なりに色々と調べ、本を読み、様々な説教や講義などを聞くのですが、私の能力が無さ過ぎて、表現力も語彙力学習能力も、そして何よりも神への忠誠や信仰の敬虔さが足りなさ過ぎて、この聖書箇所の素晴らしさを皆さんにしっかりお伝えすることが出来ていないことに申し訳なく思っております。

そのために、自分なりに身悶えしながら、泣きながら祈るのですが、それでも主は、今の私にお話しできるだけのところまでしか言葉を下さなくて、「あなたの力をするのではなく、私があなたを用いると決心し、弱いあなたを強い私が用いている」と、謙遜を知らない私に、謙遜を教えてくださいました。

主から謙遜を教えられることが、こんなにも辛くて、大変なことなのかと、でもそこにこそ幸いがあることを学ばせていただいております。

こんな話から始めたのは、ダニエル書を説教する時もそうでしたが、エペソ書の説教準備しながら死んじゃうんじゃないだろうと思うほどに辛く、

また、私なんかの命を懸けても全くもって足りないぐらいに、1 - 6 節の内容がものすごいものだということを、今の私の出来る目一杯の表現で、少しでも知っていただけたらと思ってです。

何を言いたいのか、良く伝わっていないようでしたら、申し訳ありません。

語る説教に関してもし悪く感じる場所があれば、それは全部私のせいで、聖

書の御言葉は一切悪くありません。

神の言葉である聖書の御言葉は、一点の曇りもなければ、霞もなく、完全な愛であり、摂理であり、救いであり、祝福の言葉です。

私の言葉足らずな説教から、少しでも、それを感じていただけると幸いですし、それを祈りながら、お話しさせていただきたいと思っています。

説教をこんな勘ぐらせてしまうような言葉から始めるのは、どなたからか、ご指摘を受けたからとかではなく、ただこういう言葉から始めずには、今日の説教は出来ないと、祈りながら思わされただけなので、変に勘繰らせてしまっていたら申し訳ありません。

Part One

エペソ書は、「神のみこころ」という言葉から始まります。

そして、先ほどお読みしましたエペソ書 1：3－6 を見ますと、その主語が、著者のパウロではなく、「神」だということが分かります。

「神がほめたたえられますよう」、「神はキリストにあって」、「神は世界の基を据えられる前から」、「神はみこころの良しとするとおに従って」、「神が与えてくださった恵み」というように、エペソ書の著者である使徒パウロは、怒涛のように神が主語である文章を書き連ねています。

「神のみこころ」という言葉から始まり、神が、神が、神が、神は、神はと、神を主語にした文章を語っていきます。

文章の内容もさることながら、パウロが、神を主語にした言葉を怒涛のように語った最も大きな理由は、この時のパウロには、神しか見えていなかったからです。

神こそ生きる理由であり、神こそ存在の理由であり、神こそ歌であり、神こそすべてだということが、頭ではなく、身をもって魂から実感出来たからです。

そして、その実感出来た場所が、人がつくり上げた社会構造の中で最も合法的な物理的束縛であり、苦境であり、不幸の象徴のような牢獄という場所です。

ある意味誰もが認める逃げ場のない人生の袋小路に追いやられている状況です。

パウロの心境は、こんな状況に追いやられてみないと、決して、心底実感なんか出来ないような境地かもしれません。

人はいくらでも自らの手や自らの力で逃げ道を作ろうとします。

そしてその逃げ道は、大概の場合、神とは関係ないところ、神なんていう存在

を気にもかけないところ、神という言葉を発するだけでも異様に感じてしまうようなところであり、そんなところをいくらでも作り出し、そこへ逃げて行く習性が人にはありますが、

神様は、その人の人生の主語になられるために、または、神が人生の主語であるという、人として最も大事なことに気付かせるために、袋小路へと導かれることがあります。

そんな袋小路のようなところを聖書では、色々な言葉で言い表しています。

「死の影の谷」、「水のない衰えはてた渴いた地」、「敵に囲まれ追い詰められた場」、「苦しみによって衰えている目」、「人間ではない虫けらだと言われるようなそしりと蔑みの的」等々です。

Part Two

聖書は人が罪人だと言いますが、神に敵対し、自らを神よりも高く置こうとする姿が罪の本性です。

神の前にあっても跪きたくないプライドこそ、罪の内容です。

神が主語であり、神がはじまりであることを拒否し、人を主語とし、自分を始めに置くことが、私たち人間の罪の本質です。

サタンが最初の人アダムとエバを何と言って誘惑しましたか？

「神様が、あなたたちにあれを食べてはならないと言ったのは、あの善悪の知識の木の実を食べると、あなた方が神のようになるからだ」と言いました。

そしてその直後に、アダムとエバは、「神と同じような者になりたい」と食べたのが善悪の知識の木の実です。

つまり、すべての罪の根っこ、そして罪な思いや行いの終着点は、いつでも、自らが神になることです。

自らの判断、自らの理解、自らの行動、自らの思い、それらすべてが神であることを望んでいるのが、私たちの罪の本性です。

そこには、神が主語であり、神がはじまりであることは、排除されます。

そして今、パウロは、神こそすべての物事の主語であり、神こそすべての始まりであり、神こそ我が人生の主語であり、神こそ我が生涯の始まりであり、神の御旨を求め、神の御旨に生きることこそが、本来あるべき人としての正しい立ち位置であり、その立ち位置に立てた時こそ、幸いだと実感しています。

たとえ、「死の影の谷」、「水のない衰えはてた渴いた地」、「敵に囲まれ追い詰められた場」、「苦しみによって衰えている目」、「人間ではない虫けらだと言われるようなそしりと蔑みの的」のような最大の不自由と束縛と不幸だと思われるところにあっても、幸いであることを、究極の窮地に追い込まれた場で実感し、

私たちに教えてください。

人間の不幸は、何かが足りないからでもなく、思ったような条件や環境が整っていないからでもなく、「神第一という人としての立ち位置にしっかりと立てていないから不幸なんだ」ということを身をもって示し、

また、使徒として「神第一という人としての立ち位置にしっかりと立てていないから不幸なんだ」ということが事実なんだということを人々に身をもって示せるように、神様はパウロを神第一という立ち位置に立つならば、窮地が窮地ではないということを告白できる場へと導き、今こうして、私たちにまで、伝えてくれています。

Part Three

人が不幸か幸いかは、実のところ、見た目や環境や条件では決められません。

パウロのように最悪の状況や条件でも、この上ない幸いを感じることが出来ますし、どんなに高級なものを所有し、立派な学識を得、地位や名誉があつたとしても、そこに幸いを感じるどころか不幸やどん詰まり感を感じることはいくらだってあります。

いやむしろ、高級な物を所有すればするほど、学識を得れば得るほど、地位や名誉があればあるほどに、えも言われぬ心の空洞とそこに吹く渴いた寒風を感じます。

イエス様のところに訪ね出て来たニコデモという学者であり、国会議員でもあつた人や、人々から後ろ指を指されはしたもののお金持ちで富んでいるという身分にあつたザアカイなどは、まさにそうでした。

私たちは、世間で羨ましがられるような地位や所有や名声がある人を羨みますが、実のところ、その心はからっからで、空しい果かなさを覚えていると事実には中々目が行きません。

人の幸いは、条件に依らず、神が主語であるかどうかによります。

人の幸いは、条件に依らず、神が主語であるかどうかによろということ、その全生涯を懸けて実証するために、神に選ばれた実験台のような人生を生かされたのが、イスラエル王国の3代目王であるソロモンです。

ソロモンは人が羨ましがるものすべてを神から与えられました。

謙遜な心、人を思いやる優しさ、人としての度量と寛大さという人格的な品性だけでなく、人類史上未だかつて彼ほどの知性と英知を持つ人はいないほどの知恵と知識に満ちあふれた学者でもあり、優れたリーダシップを発揮する政治

家でもあり、経済的には大富豪でありました。

人が羨むようなありとあらゆる快樂に身を委ねることも出来ました。

信仰の路頭に迷う時期もありましたが、基本敬虔なクリスチャンでもありました。

普通ならば、ここまでの条件と環境が備わっているようならば、人から疎まれ、嫌われ、謀反を起こされ裏切られてもおかしくないのですが、その人格と品性のせいか、好き放題生きているはずなのに人々からは尊敬され、彼の治世の間は安泰だという太鼓判まで、神様から押されます。

人として身に付けることの出来る最大の見た目と環境と条件を身に付けていた人が、ソロモンという人でした。

列王記第一 3 : 10 - 14 (パワポ)

列王記第一 4 : 29 - 34 (パワポ)

伝道者の書 2 : 4 - 10 (パワポ)

(ソロモン自身の言葉です。)

これが、ソロモンという人が神から選ばれ、「人の幸いは、条件に依らず、神が主語であるかどうか依る」ということを実証するために備えられた、人としてこの地上で得られるすべてを手にした姿です。

そして、このような人の羨むものすべてを手にしたソロモンが下した答えが、これです。

伝道者の書 1 : 18 (パワポ)

伝道者の書 2 : 11 - 23 (パワポ)

人は、知恵がないことを妬み、知識がないことを羨み、財や所有がないことをもって不満を並べ立て、条件や環境が整っていないことをもって不公平だと言いながら、もっと知恵があれば、もっと知識があれば、もっと所有があれば、もっと条件や環境が整っていれば、幸福であり、幸せであるはずだとお互いに教え合い、思っていますが、ソロモンは言います。

知恵や知識が増せば、悩みも増し、苛立ちも増す。

財や所有は、行き着くところ心を煩わし、空しく、取り留めもないような風を追うようなもので、

どんなに条件が整い、どんなに環境が整ったとしても、すべてが労苦であり、行き着くところ死であり、願っていたような想像していたような幸福や幸せはなかったし、感じなかったと言います。

そして結論として言っているのが、伝道者の書の最後の部分です。

伝道者の書 12 : 13 – 14 (パワポ)

新共同訳聖書は、「神をおそれる」のおそれるを畏敬の畏という漢字を当てていますが、新改訳聖書では、恐怖の恐という字を当てていて、私は、「よくぞ、恐怖の恐という字を当ててくれた！」と思っています。

と言いますのも、畏敬の畏よりも、恐怖の恐という漢字の方が、神を恐れることがストレートに伝わってくるからです。

神に尊敬や畏敬の念を持つ程度ではなく、そのものずばり、私たちは神様に恐怖を抱くほどに、恐れる必要がありますし、「それほどの恐れを神に抱くことこそが、幸いな事なんだ」とソロモンが言わんとしていることがよりストレートに迫って来ます。

愛の神に、恐怖の恐という恐れは合わないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちが神から離れることや、神を第一にしないことに恐怖を抱けるならば、それこそ幸いなことです。

Part Four

社会は、神に恐怖を抱くことを忘れた状態で回っています。

神に恐怖を抱くことを古めかしい、科学的でもない、迷信じみたものだと言いますが、本当にそうでしょうか？

神を第一にせず、神に恐れを抱くことを忘れた私たち人間が、今まで何をしてきましたか？

人を傷つけ、人を踏みにじり、自分の欲望を満たすことばかりに執着し、戦争を起こし、地球が何個あっても足りないぐらいの武器を作り続け、人を傷つけるばかりか、地球を壊し、宇宙までも人間の作り出したゴミでいっぱいにしようとしています。

それでもなお、神を恐れることに立ち返ることはなく、我こそ神だという主張を続け、神のみこころよりも自分の心、神から始めるのではなく自分から始め、神に主語になっていただくのではなく自分が主語となり、良くて神を修飾語にする歩みからの脱却を、それでもしようとしません。

やっぱり神の座に着きたくて仕方のないエゴとそのエゴによる偽の祝福の追

求からの脱却を使徒パウロは、自分の身を裂くほどの経験がにじんだエペソ書の序論部分を通して、語ってくれます。

身を粉にししながら、私たちに教えてくれます。

パウロは、エペソ書のみならず、他の手紙でも「神のみこころ」という言葉から始めることが多々ありますが、それほどに、パウロはイエス・キリストに出会ってからは、すべてのことを神のみこころに従うのか、自分の心に従っていくのかということを格闘してきました。

自分の心に従い、ソロモンのような何の価値もない肉を満足させる血肉の戦いに人生を消耗するのではなく、神のみこころに従い、上にあるものを求める生き方を全うしようと格闘しました。

無理矢理そうするように強いられていたのではなく、いただいた祝福が偉大過ぎて、自然とそうなるようになっていきました。

人がキリストに出会った時体験する最大の幸いは、不確かな自分の心に頼りながら生きるところから、神が求めておられることを探り、それを指針にして生きたい、生きられるということです。

Part Five

エペソ1章の「すべての霊的祝福」という言葉を何度も見てきましたが、祝福という言葉を他の聖書の言葉で言い換えますと、幸いという言葉になると思います。

つまり、私たちキリストにある聖徒たちは、天上にあるすべての霊的幸いをいただいた者たちです。

ソロモンが、全人生、全知恵、全知識、全財産、全人望、全労力をかけて追及してみたところ得ることも出来なければ、感じることも出来なかった幸いを得、幸いを実感するのです。

大学生の頃、ロシアとカザフスタンに1ヶ月の短期宣教に行ったことがあるのですが、

ロシアのモスクワからどこかに行くために電車に乗る際、短期宣教チーム員全員分と同伴してくださっていたベラさんというご婦人のためのコーラを買ってみんなに配ったのですが、そのコーラを受け取った全員の中で唯一ベラさんだけが、缶コーラ一本をものすごく喜ばれて、「神様に感謝し、神様をほめたたえます」と満面の笑顔で仰ったんです。

その賛美の言葉と純粋な信仰による笑顔が、四半世紀経った今でも忘れられないですし、その時、信仰者として大事なものが覚えていなかったという苦い思い出が、今でも思い出されます。

高々一本の缶コーラに神様をほめたたえるほどの幸を感じる一方で、全世界の手に入れても不満と恐怖に苛まれるダニエル書のネブカドネツアル王のような不幸な者との違いは、ただ一つです。

はじまりを神としているのかどうかです。
人生の主語が神であるのかどうかです。

はじまりを神としたくない、自分を始めにしようとすればするほどに、また自分を始めにして物事を進めれば進めるほどに、眼の光が奪われ、空しさと混沌が心を支配し、神よりも自分を大事にすればするほどに、横道に逸れて行き、混沌を極めていきます。

逆に、神のみこころを問い、神のみこころを探り、神のみこころに忍耐をもって従おうとするならば、そこには満ち足りる幸があります。

祝福を言い換えると幸いだと言いましたが、幸いの概念を覆したのが、主イエス様の山上の垂訓の言葉です。

マタイの福音書 5：2－12（パワポ）

人の幸いは、条件を整え、一つでも多くの良い条件を身に付けることには依りません。

人の幸いは、キリストを前にして自分の貧しさを素直に認められるかどうか、キリストのように神を第一にしない世の不義を悲しむことが出来ているのかどうか、

キリストのように人の痛みに共感し、人の喜びを我が喜びとして喜べるのかどうか、

そして、キリストを第一にして歩むゆえの迫害や困難があつたとしても、それこそ真つ当な人生であると思えるかどうかにかかっていると言います。

はじまりが神であること、すべての物事の主語がイエス・キリストであること。これが、私たちに与えられている最大の霊的幸いです。

最後にもう一箇所だけ、使徒パウロの言葉を見えます

コロサイ人への手紙 3：11－17（パワポ）

パウロは、キリストがすべてでした。

キリストの言葉がすべてでした。

キリストの愛がすべてであり、キリストの赦しがすべてであり、キリストを賛美することがすべてであり、すべてをキリストの名において行うことが幸いであることを知り、それを実践し、また実践できるところへと導かれていきました。

キリストを第一にする時に感謝が湧き、父なる神に感謝を献げられる幸いを噛みしめていました。

Conclusion

私たちの人生の問題は、はじまりが神であるかどうかです。

すべてののはじまりを神であると告白できるパウロだから出て来た言葉が、「世界の基が据えられる前から」という物質の始まりをも超えた神の摂理をほめたたえる言葉です。

人は、目に見える物質の始まりが気がかりで仕方がなく、その目に見える物質の中だけで答えを見出そうとし、目に見えるものに翻弄されながら生きていますが、パウロは違います。

すべてののはじまりを神とする生き方、すべての物事の主語を神とする生き方が、目に見えるものに翻弄される呪縛からパウロを、私たちを解放し、すべての霊的幸いを実感できるようにしました。

はじまりは神です。

主語も神です。

皆さんのすべてののはじまりと主語が、神であることを願ってやみません。

お祈りいたします。

祝祷：神を恐れよ。神の命令を守れ。

これが人間にとってすべてである。

キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。